当院の宿直時の記録から見た過去12年間の傾向と推移

◎母良田 静[1)]、大井 惇矢[1)]、堀内 弘子[1)]
八戸市立市民病院[1)]

【はじめに】「働き方改革」が叫ばれる昨今、労働環境の整備や個人の事情に応じた働き方選択の必要性が高まっている。今回、経験等を問わず誰もが不安なく勤務できる状態を目標とし、条件別での労働量の把握が必要と考えた。そこで過去12年間における宿直時の検査件数・患者数・実働時間の傾向を調査し、若干の知見を得たので報告する。

【調査内容】①検査項目を生化学・血算・凝固・一般・細菌・輸血・心電図の7つに大別し、年次推移や変化率をみた。②患者数と実働時間の年次推移と、曜日・月別で差が生じるかを統計により求めた。③実働時間の増減に影響する因子を検索した。

【結果】12年前と比較した検体検査件数は概ね増加しており、特に輸血払出件数は4.2倍と他項目と比較し大幅な増加があった。一方、時間外心電図の件数は1/5に減少していた。また、比較的時間を要する輸血払出の件数に着目し実働時間との関係を解析したところ、13件以下においては高い相関を示したが、以降は相関が認められなかった。

【考察】心電図件数が減少した原因として、時間外心電図オーダーに対応する病棟を限定するようになったこと、急患室や研修医等が自分達で実施するようになったことが挙げられる。12年間の検査件数の伸び率は輸血が最も高く、平成21年にドクターヘリ、平成22年にドクターカーが運用されたことにより重症の救急外来患者が増加したことが原因として考えられる。平成26年度以降は患者数が減少傾向にあり、これは救命医の人数が同年より減少しており診察可能な患者数が限られることや、平成28年から紹介無しの急患室受診料が値上がりし、軽症患者の受診率低下が影響したと思われる。14件以上の輸血払出で実働時間との相関が低下したが、依頼が大量にあった日は複数名が業務を手伝った場合も多く、実働時間短縮に繋がったと考えられる。また患者数や実働時間が曜日や月で有意に異なることも分かり、宿直勤務に不慣れな職員を配置する際の参考にできると思われる。

【結語】当院は数年以内の夜勤体制への移行を検討しており、今回得られた知見を今後の勤務体制や環境の構築に役立てていきたい。

連絡先：0178‐72‐5111(内線2422)